

方剂名	効能	生薬組成
書籍	主治および証	病機 方意

補益剤 補陰剤 7

<p>いっかんせん 一貫煎</p>	<p>滋養肝腎・疏肝理気</p>	<p>沙参 9g・麦門冬 9g・当帰 9g・生地黄 30g・枸杞子 12g・川楝子 5g 水煎し服用する。</p>
<p>柳州医話</p>	<p><主治> 肝腎陰虚、肝気不舒 胸脇部が脹って痛い、腹満、呑酸、苦いものの嘔吐、咽や口の乾燥感、舌質が紅絳で乾燥、少苔～無苔、脈が細数あるいは虚弦などを呈す。</p> <p><病機> 肝腎陰虚で肝気の疏泄が失調した病態である。 肝腎の精血が不足したために肝気の疏泄が失調し、肝気が舒暢できずに停滞化熱し、肝の経脈に横竄するので胸脇部が張って痛み、胃に横逆するので腹満、呑酸、吐苦がみられる。津液不足と胃熱により咽口の乾燥、舌の乾燥が生じる。舌質が紅絳、少苔～無苔、脈が細数は、陰虚を示す。陰虚の肝気不舒では虚弦脈を呈する。臨床的には、この他に肝腎陰虚の症候がみられる。</p> <p><方意> 本方（一貫煎）は柔肝疏鬱の名方である。 主薬の生地黄は肝腎を滋補し虚熱を清し、養血補肝の当帰・枸杞子と共に柔肝によって肝気の疏泄を調える。沙参・麦門冬は生津養胃し、津液を充足して胃気を下降させる。さらに疏肝の潤薬である川楝子を少量加え、肝気を疏泄すると同時に内熱を清する。全体で滋陰柔肝、疏鬱に働く。</p> <p><参考> 一般に、肝気横逆の胸脇脹痛に対しては疏肝理気薬を主体にするが、理気薬は香燥の性質を持つものが多く、肝腎陰虚の気滞に使用すると耗液傷気して悪化させることになる。それ故、本方（一貫煎）は滋養肝腎、柔肝を主とし、疏肝して傷陰しない川楝子を少量加えているのである。</p> <p>加減法 食欲不振があるか、本方が胃にもたれるときには、生麦芽 12～30g を加える。 口の苦味がつよければ、黄連 1～1.5g を、便秘には、麻子仁、あるいは栝楼仁を配合する。 咳嗽・少痰など肺陰虚を伴うときには、栝楼仁・川貝母を加える。 胃陰虚が明らかなら、石斛・玉竹・天花粉などを加える。 口渇、多飲が甚だしければ、石膏・知母などを加える。 肝臓腫大がみられれば、鼈甲などを配合する。</p>	